

---

# ディスカラー・デッド

松ノ山

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デイスカラー・デッド

### 【Nコード】

N1713Y

### 【作者名】

松ノ山

### 【あらすじ】

世界は小さく、狭くなった。世界各地で起こった戦争、大崩潰。人々は隔離壁で囲まれた偽りの平穏を続ける。機械を操り、日々の生活を繋ぐ者。人を助け、見えない明日に怯える者。何気なく日常を送る者。

皆、未来への不安を抱え、平和を望んでいる。

そんな世界で生きる少年、少女の話。

壊れてしまったものを、失ってしまったものを取り返すことは難

し  
い。

## 人狩りと蠅螂（前書き）

気分転換に始めました。

期待はせずに。きままに更新していきます。はい。

## 人狩りと蠍

世界は鈍色の空に覆われていた。大地に凝然として生える高層建築は、どれもこれも半壊していた。ビルの剥き出しにされた鉄筋が肋を連想させる。己を支える柱には亀裂が走り、崩潰寸前で維持されている。

蜘蛛の巣の如く巡らされたアスファルトの路はいたるところで断裂し、その役割を放棄していた。錆びが生じ赤褐色に覆われた自動車が遺棄されて、地平まで続く行列を成している。

寂寞とした街、かつては日本の大都市であった。既にその名は忘れられ、その周辺の土地も含めて『外部居住区関東地区』と呼称される。

現在に過去の隆盛した街並みは見られず、荒寥とした廃墟が鎮座していた。

それでも、そんな劣悪な環境に人は生活していた。

彼らは生活の場を追われた浮浪者であった。身に纏う衣類は粗悪なシロモノばかり。裸体を隠すだけの布地を服と呼ぶのなら、まさにそれであろう。

垢に塗れ、見るからに汚臭を放っているようなモノもあれば、擦り切れ引きずるほど解れているモノもある。

彼らが心底、切望すると言えば新調の服と十分な食事だろう。最低限度以下の生活を強いられた彼らには、これまで救いの手が差し伸べられることがなかった。そしてこれからも。

代わりに与えられるのは、夥しい鉛の銃弾や冷酷な刀身であった。

『人狩りだ！！ 逃げるッ』

怒声と絶叫が混濁し、廃墟を徘徊していた人々は思い思いに安泰

の場所へと疾走する。

人々の背後からは複数、顔面に鉄製の防護面をした巨漢の人間が迫っていた。高さは二メートルになるだろうか。その手には既に突撃銃が構えられている。

死神の行進とも呼ばれ、この廃墟の人間の怨恨の対象の存在。いや、世界中から見てもその存在は嫌悪されていた。

彼らの目的は資源採掘の労働力の蒐集であり、そのためにその人道から外れた行為も正当化されてしまっていた。

突如、反対から乾いた射撃音が響いた。男達が拳銃の照準を防護面の人間に定めていた。

「くそっ！！ 女子供を優先して逃がすんだ！！ 男手をもっと回せっ」

矢継ぎ早に銃口が火を噴き、放たれた銃弾が標的に見事到達する。不可解にも撃たれた人物は何一つ動ぜず、被弾部を押さえることをせず、手にしたアサルトライフルの引金を引いた。フルオート射撃の雨が男達の存在を掻き消し、壁や地面に赤黒い滲みを残す。

「わあああああああああッ」

一気に瓦解する防衛前線を蹂躪するように銃弾が浴びせられる。撃たれても止まらない死の行進は続いていく。

半壊したビルの頂上で、そんな光景を眼下に見下ろす影像があった。

『どうすんだよ。もう始まっちゃったぞ』

『じゃ急いで！！ 依頼はデッドラインの殲滅及び人々の援護よ。なるべく迅速に行動して。あまり悠長にやっていると報酬が減らされ

るから』

通信越しの会話。少年と少女の声が飛び交う。

『了解。んじゃ、一掃してきますか』

『ちゃんと完遂してよね。前みたいに取りこぼすなんて事がないよ  
うにね』

『了解』

少年 三ノ瀬美鶴は眸を閉じ、大きく深呼吸をした。いや、実

際には肉体はこの場にはなかった。あるのは金属の骨格をした、人  
に似た背丈の無機質な機械だった。

騎士 精神のみをそれに設けられた擬似脳に移し、操縦する武  
装機械人形。

美鶴はその操者の一人であつた。

原動機の駆動音が鳴り、美鶴の騎士が稼動を始める。

まるで蠅螂を想起させる流麗な形姿。目を引くのが右腕の肱部分  
から先、そこに巨大な折りたたみ刃が収まっている。それがこの美  
鶴専用騎、《鎌錐》の主兵装、大刀兼大鎌の武器 デスサイズで  
ある。

さすがに減給は痛い。美鶴は殺戮を繰り返す人影を視認する。こ  
の場所は相手からは死角になっている。手早く相手の数を把握する。

『重武装兵がいるから注意して、騎士の損傷は最小限に止めてよ』  
「分かってるよ。てかいちいち話しかけんなよ、由佳里。集中が途  
切れるだろ」

『なによ、私は君の補助者だよ。逐一、リアルタイムに指示を出す  
から』

少女 羽城由佳里はしろ ゆかりの澄んだ声が脳裏に響く。騎士との精神接続状態時には、操者の体感世界は生身の肉体時と大差ない。

変わるとすれば、敵を捕捉した時のカーソルが視界に表示されることと、熱や冷気を感じないことだろう。不思議にも衝撃などの痛覚は感じる事が出来る。

「んじゃ、任務を始める」

『目標の駆逐及び、人々の援護だからね』

ここで救済といえないのが、齒がゆく思える。今ここで死神の手から救ったとしても、その後に幸せはないのだ。その場しのぎの行動。

だが、それも依頼された任務である以上、私情を挟まず遂行しなければならぬ。

美鶴は一気に跳躍した 自分の肉体を動かすように自然な動作で、鎌錐が宙に躍り出る。美鶴の人間としての肉体は、遙か数十キロ離れた日本の都市の老朽化し寂れたアパートの一室で眠っている。その一室には由佳里が付き添っている。

幼馴染であり、操者と補助者の関係。戦うもの、見守るものの関係である。

眼下に迫る人影に向け、右腕を後ろに引いた。刃が収納されたデスサイズは強力な打撃武器にもなる。風切り音かざきを伴って突き出す、美鶴はデッドラインの一人を地面に叩き潰した。地面が陥没し、視界いっぱい金属片が飛び散る。人間のようであったそれは一体の機械人形アントロイドであった。

『西の凡庸騎士ね。発声機能も無い粗悪品ばっかで性能面では圧勝』



ね。ただ銃器には気をつけてよ。相手はやっかいなシロモノを持ち込んでいるみたい。あつ、後ろッ』

由佳里は、リアルタイムで周辺の解析やルート検索などを行う。騎士頭部に備えられたセンサーより随時送信される情報がそれを可能にしている。

美鶴は上半身を捻り、右腕を振った。

鈍い衝撃を伴って、背後の騎士が弾き飛び、自動車のフロントガラスを突き破る。そのまま沈黙。

殲滅依頼は楽だ、難しいことは考えず破壊すればいい。

カーソルが自動探知して敵の位置を知らせる。大口径機関銃を構える騎士がこちらに照準をあわせていた。すかさず跳躍し、主兵装を展開させる。

黒光りする乱れ刃の刃紋が露になる。大鎌　デスサイズ。完全展開時には一振りの大剣にも変貌する。

死神の鎌で死神を刈るのか、美鶴は可笑しく思った。

マズルフラッシュ銃口炎が瞬き、ライフル弾が吐き出される。その上を跳んで、落下と同時に横薙ぎの一撃を放った。

敵の胴体を裁断し、火花を散らす。地面に転がった騎士の赤い双眸が、睨んだ錯覚を覚えて踏み潰す。

そうして周囲を見回せば、やけに大きな人影シルエットがあった。距離計レンジファインダーが知らせたのは一五〇メートル。

あれか、厄介なシロモノは。

『カノン砲よ。あんなものを騎士に装備させるなんて……。完全に人の捕縛目的の利用じゃないわね』

美鶴も由佳里に同意見だった。さすがにあれは戦争に向かう戦車

さながらだ。

右肩に装備されたカノン砲の砲身から撃ち出されるのは、榴弾を始めたとした遠距離射撃用弾であろう。周辺に人がいることを考慮すれば、撃たせるわけにはいかない。

背部の加速機ブースターを起動させる。同時に冷却装置ラジエーターが急稼働を始める。

『あんまり、加速すると熱暴走するよ』

『下手打たないさ。一瞬で終わらせる』

『うん、分かった』

由佳里との会話を簡便に済ませ、美鶴は敵を見据える。前に踏み込むと同時に、背中に四枚の光翅が生える。そして世界の色が混濁する異様な速度での加速で跳んだ。

擦過しながら距離を詰める。

『注意して、来るよッ』

前方で閃光が走った。美鶴は悪態をついてデスサイス振り上げる。転瞬、その刀身を通過した榴弾が寸分違わず二つに裁断される。それに続く爆発。

「クソヤロ、撃ちやがったッ」

背後からの爆風に押し飛ばされ、体勢を崩しかけながら残り距離を跳ぶ。

残り十メートル。敵が再照準するのが分かった。力任せにデスサイスを振り下ろした。

視線の先で敵騎士の右肩部分が断裂され、その背後のビルのコンクリートが轟音と共に破砕した。デスサイスの一撃が斬撃を飛ばしてみせた。《鎌錐》主兵装、特有機構デイスコネクター『引き剥がすもの』、射程距

離を有した剣閃である。

視線の先でカノン砲が完全に分離し、重厚な音を響かせ落下する。武器の無い騎士など、ただのマネキン人形に過ぎない。

加速を伴ってそのまま《鎌錐》の逆間接の脚部で敵を踏み倒すつもりだった。下手を打った。

もの見事にバランスを崩し、美鶴は相手ごと地面に突っ伏した。

「やっちまった……」

慌てて調べる。損傷軽微。何とかなるだろう。

『……何ともならないわよ』

由佳里が心を読んだかの如き応答をする。通信越してもその表情が強張ったのが分かる。

『何華麗に転倒してんのよ！！ あとで修理するの私なんだからね！！ 君の寝顔に油性の髭を生やすよ』

どんな嫌がらせだよ。美鶴は呻いた。

由佳里が不機嫌になる訳は重々承知している。彼女はサポーターと同時に、整備士としても尽力してくれている。故に馬鹿な行動で傷つけられることに憤りを覚える性質らしい。

壊すなら格好良く、度派手にやるのを所望している。こちらとしては度派手に破壊されたくも、したくもないのだが。

「悪かった、次は気をつける、ホントにごめん」

『ペンキにするわよ』

「やめる！！ かぶれるだろッ」

人が仕事してる間に、人の身体に何するつもりだ。

そうこうする間に視界に新たにカーソルが表示され、敵の捕捉を伝える。

やれやれ、ザコばかりだが数がある。

美鶴は気持ちを切り替え、デスサイスを構えた。もうもうと立ち昇る砂埃、漂う硝煙。その中に機影を濃く、浮かび上がらせていた。

二〇二五年、世界は戦争によって荒廃し、かつての国家や政府は消滅した。世界の再生計画は企業連合体の分裂により途絶され、世界は今なおその傷跡を残したままにしている。

二〇三四年、自社の利潤を優先した巨大企業は、その発展のために世界中から労働力を掻き集め、終わらない抗争を激化させていた。デットゾーン外部居住区、戦争の爪痕を色濃く残す地域。助けなど望めるはずのない毎日が延々と繰り返される。

その場所は今現在も、戦場に取り残されている。

『終わった。依頼主クライアントに報告頼む』

『了解。お疲れ様。五時のタイムサービスの前に帰投してね』

『は？ 俺にお遣い頼むのかよ!?!』

『いや、荷物持ちだけど。んじゃ一旦通信切るよ。じゃね』

その言葉で不通を知らせる表示が現れる。

はあ、随分な扱いだな。

美鶴は憂鬱に曇った空を見上げた。足下にはバラされた騎士が機能を停止している。

見渡せば逃げ惑っていた人々がこちらを窺うようにしている。

子供が数人、手を大きく振りかざしていた。

『ありがとうございますッ』『助かりましたッ』そんな声がいたるところから上がるも、大人達がそれを制する。

『さっさと失せるッ』『俺達を救ってくれッ』『俺達が何をしたっていうんだッ』

彼らは悪くない。残念ながら自分には彼らを本当の意味で助けることなど出来はしない。自己嫌悪に身が振よじれそうだ。

「俺もまた、救われぬ者だよ」

美鶴は誰にも聞こえないように、由佳里に聞こえないように、そう呟いた。

二〇二五年、その日を人々は忘れることが出来ない。

その年、その時、世界は終わった。『大崩壊』ブレイクダウン そう総称される世界戦争が起きた。

二〇三四年、世界は未だ争いが絶えない。

人々は、欺瞞で溢れる世界に生かされている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1713y/>

---

ディスカラー・デッド

2011年11月3日03時06分発行